

小学校外国語活動の充実に向けて

著者	中川 洋一
雑誌名	北翔大学教育文化学部研究紀要
巻	1
ページ	119-127
発行年	2016
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00002187/

小学校外国語活動の充実に向けて

Contribute perfection of foreign language activity for primary school

中 川 洋 一

Yoichi NAKAGAWA

I 小学校外国語活動が現在の立場を形成するまで

平成20年に改訂された学習指導要領において、小学校第5，6学年に外国語活動が導入された。経緯等は各種文献，発刊物等に詳細が述べられているので，ここでは省略するが，その間，昭和61年の臨時教育審議会二次答申以降，各種調査や答申等において，国際情勢，経済情勢等に鑑みながら，国際理解教育や総合的な学習の時間での活用など，着実に教育内容としての一定のまとまりを確保するに至ってきた。平成20年1月の中央教育審議会答申において，①社会や経済の急速なグローバル化進展にともなう外国語教育の充実，②小学校段階で外国語に触れたり体験することによる，中・高等学校におけるコミュニケーション能力育成の素地づくり，③教育の機会均等の確保や中学校との円滑な接続の観点から，国としての一定共通指導内容の提示，高学年における一定の授業時数（年間35週）の確保などが示された。これを受けて，文部科学省は同年，学習指導要領の改訂を行い，第5，6学年に外国語活動が位置付けられた。

条件整備として，文部科学省はカリキュラム例，教材作成・配布，教員研修等を実施した。特に，文部科学省が全学校に配布した「英語ノート」は，「小学生に英語をどのように指導したらよいのか」「英語は苦手だが・・・」という教員にとっても，具体的かつわかりやすく外国語（英語）を指導する上で，なくてはならない教材となるはずであった。

にもかかわらず，政権交代直後の平成21年秋，行政刷新会議による「事業仕分け」が行われ，「小学生に英語はいらない」「デジタル教材で十分」果ては「税金の無駄」論議に至る始末で，「英語ノート」の廃止が決定された。学校現場は混乱に至る。しかしながら，文部科学省が行った意見募集において，この事業仕分けの結果（英語ノートの廃止）に対する国民の反対意見は9割を占めた。長年，専門家や各機関が論議を重ねて導入に至った外国語活動について，新学習指導要領移行期の1年目にして，マスコミ的な表現を使わせてもらえば，「わずか30分の事業仕分け」で，その核となる「英語ノート」を廃止という現実に対する国民の不安の表れを見ることができる。

その後，「英語ノート」は表向きには廃止されたが，曖昧な状況での活用は継続され，全国の小学校教員から，共通教材のない不安や負担の声が多くあがった。

この「事業仕分け」以降，やや中途半端かつしばみかけた小学校外国語活動であったが，文部科学省や各種機関の地道な努力により，平成24年1月，英語ノートに代わり，「Hi, friends!」

が新たな教材として登場し、全国の小学校に配布されることとなった。同時に、文部科学省からは、教師用指導書、デジタル教材（DVD）等も併せて配布され、教師の指導の充実が図られる方向に進むこととなった。

Ⅱ 教員養成段階における実態

本学科（教育学科）は、主に小学校教員を目指す学生が集まっている。筆者は、学科の2年生を対象とした「小学校英語」の講義を担当することとなったが、初期段階の講義で、その実態の把握を行ってみた。それは、「小学校英語（※小学校外国語活動を、以下、小学校英語と呼ぶ場合がある）」に関して、「知っていること」や「自分自身の状況」「講義を通してわかったこと」などである。

（１）中・高等学校で履修した英語とのギャップ

講義の初期段階で、小学校学習指導要領解説外国語活動編をもとに、理論的な内容の学び取りを行うとともに、小学校英語の実際の授業風景の映像をみせた。学生たちの感想の多くは、「英語＝文法のイメージとは大きく違い、体験的で活動的な学習が中心であることに驚いた。」「英訳・和訳することが英語だと思っていたが、小学校英語は、いかに楽しい活動を取り入れ、子どもたちをその気にさせるかということの重要性がわかった。」「学習指導要領に述べられている体験、活動、コミュニケーションなどについて、楽しみながら行うことの大切さの意味がわかった。とともに、中・高等学校のような、かたいがちがち英語を小学生に行うと、小学生段階から英語嫌いを作ってしまう危険性も感じた。」など、大学生が持っている、いわゆる“受験英語”のイメージを払拭することの重要性を開き取ることができた。

（２）アンケートに見る実態

上記（１）にあるように、受験英語として履修してきた中・高等学校の英語のイメージを取り払い、小学校英語としての学びを成立させるために、また、そのような授業が行える教員を養成する上で必要な要素を見つけ出すために、講義の初期段階で、簡単なアンケート調査を行った。

頁数の関係から、全ては掲載できないが、以下に、アンケート調査結果からの主な概要を述べる。

外国語活動に関するアンケート（抜粋） 区分 小一種選択 2年生のうち52名回答

各設問に対して、5段階で回答

- | | | |
|---------------|------------|-----------|
| A よく理解できている | B 理解できている | C どちらでもない |
| D あまり理解できていない | E 理解できていない | |

設問1 小学校外国語活動設立の意義

A 19% B 67% C 11% D 3% E 0%

設問2 指導内容の概要把握

A 19% B 51% C 22% D 7% E 3%

設問3 指導内容を具体化する方法

A 5% B 20% C 17% D 55% E 3%

設問4 カリキュラムの作成方法

A 2% B 10% C 13% D 65% E 10%

設問5 指導案の作り方

A 0% B 17% C 25% D 55% E 3%

ここまでを分析すると、設問1,2のような、学習指導要領などの文献や資料をもとに行った講義内容についての理解度が高く、また、いわゆる理論段階での理解の度合いは高いと考えられる。一方で、設問3, 4, 5にあるように、具体的な授業の実際に関する面での不安を抱える学生の多いことがわかる。自由記述欄からも、「子どもと英語との距離感をどのように埋め合わせたらよいのか。」「教師自らが身に付けておくべき英語力とは、どの程度のものなのか。」「楽しませる授業づくりについてもっと学びたい。」「教室内の環境づくりをどの程度にしたらよいのか。」など、具体的な指導場面での教師の在り方等に関するものが多かった。

(3) 講義の回数を重ねていくと

上記のアンケートは、まだ、シラバスでは初期段階で行った調査である。ちなみに、本年度のシラバスは、次のようになっている。

第1回～第4回・・・主に、小学校学習指導要領解説外国語活動編からの理解を中心として、「意義と目的」「現状と背景」「コミュニケーション能力」等について学ぶ。

第5回～第8回・・・主に、母語習得、語彙、表現等を中心として、「Hi, friends」の活用について、文部科学省デジタル教材 DVD を活用しながら、実際の授業へのイメージを獲得させる。

第9回～第12回・・・実際の授業の在り方に必要な要素として、教材・指導方法・評価などについて体得させる。

第13回～第15回・・・指導案作成と模擬授業の実施。確認テスト。

※シラバス計画内容の抜粋

第1回 小学校における外国語活動の位置付け

第2回 小学校外国語活動の意義と目的

第3回 「Hi, friends」にある英語教材についての現状と背景

- 第4回 コミュニケーション能力について
- 第5回 言語習得
- 第6回 「Hi, friends」にある英語教材について1
- 第7回 「Hi, friends」にある英語教材について2
- 第8回 外国語活動（英語活動）のあるべき姿
- 第9回 小学校英語の授業方法
- 第10回 小学校英語の評価
- 第11回 小学校英語の歌・ゲームを中心とした授業づくり
- 第12回 単語、語句、文の扱いに着目した授業づくり
- 第13回 模擬授業の発表1
- 第14回 模擬授業の発表2
- 第15回 小学校外国語活動についてのまとめ、確認



写真1 教材づくり



写真2 交流の様子

講義の回数を重ね、実際の授業のイメージが形成され始めた時期（第8回～第9回）の段階で、再度、記述式による調査を行った。以下は、学生の代表的な意見である。

① 「Hi, friends」を使った学習について

- 「「Hi, friends」を自分でも使って（講義を）受けてみて、大学生の今でもこんなに楽しくできているので、小学生に行ったら、更に楽しく盛り上がりながら学ぶことができ、英語が苦手などと言う意識もなくなると思う。この教材「Hi, friends」を、児童が学びやすく活用していくことで、苦手意識をなくしていくことができると思った。」
- 「Hi, friends」での学習は、チャンツやアクティビティが多いので、子どもが体験を通して学べると思いました。「Hi, friends」には、沢山の活動的な教材があるので、それを子どもにあった活動に工夫しながら活用していけたら良いと思います。」

② チャンツや歌について

- 「チャンツや歌にのせて声を出すことで、リズムが頭に残っていて、英単語が覚えやすいと思った。小学生のうちから英語に親しむことで、中学生になってから文法などを習うときには、抵抗なく学習に入っていけるのではないかと考えた。」

- 「ペアで取り組む活動などは、たくさん取り入れたほうがいいと感じた。英語を通してコミュニケーションをとることで、英語に関心を持つばかりでなく、コミュニケーション能力そのものが向上すると思う。自分自身、英語が苦手なので、どのような活動を取り入れると、子どもの興味関心が高まるか、その手法を身に付けたいと思った。」
- 「歌はいいですね。手の動きと同時にやることで、更に楽しく学習に集中できると思います。大学生の私でさえこんなに楽しいのですから、小学生はもっと喜ぶでしょう。教科書を眺めるだけでなく、デジタル黒板や DVD など ICT を効果的に使ったわかりやすい授業も考えていきたいと学びました。」

一方、課題点についても述べている。

- 「チャンツの中に対話文が出てくるなど、難しくなってきたのがわかる。スピードについていけなくなる子が出てくるのが予想できるので、土台の部分の育成が重要だと思う。その都度、確認することを大切にしながら一つ一つを段階的に取り組まねばならないと思った。」
- 「これまでの講義を受け、ビデオなどをみながら気になっていたのですが、どこまで発音の指導をすればいいのでしょうか。先生が正しい発音で言っても、子どもの発音はどの程度まで言えるのでしょうか。音声重視の小学校英語であるなら、正しい発音に近づけていくことも大切だと思いつつ、それをやり過ぎると、英語嫌いの子ができてしまうのでは、と、悩んでしまいました。」

Ⅲ 講義の中で重視したいこと

前述のアンケートや日常の講義の折などに、学生たちが、「より具体的な指導技術を身に付けたい。」との願いを聞くことが多い。現段階では、「外国語科指導法」の講義が設定されていないため、具体的な指導法を実践的に学ぶ場や機会が乏しいのも事実である。

そこで、講義「小学校英語」において、特に、重視したことを述べたい。

1 小学校段階における英語活動の意義の理解

小学校段階にある子どもは、新しい事象への関心が高い上に、異文化や外国の人との関わりなどを自然に受け入れる柔軟性や感性を持っている。このような時期に英語に触れることは、異文化を尊重する態度や外国の人たちとのかかわりにおいて、英語を活用しようとするコミュニケーション能力を高める観点から、大きな意義を持つことになる。また、英語の音声面の習得能力は、大人よりも子どものほうがはるかに優れていることは、脳科学的にも立証されている。講義においては、この「子どもの能力」「子どもの特性」について理解させることが、英語を学習する意義の理解に必要である。

2 英語活動に期待される効果の理解

英語活動は、子どもたちの心を開放的にし、異質なものを認め受け入れようとする力の育成に効果的である。特に、コミュニケーション能力の核が、「異質性の受容」にあるとさえ言われている今、次のような効果を期待しながら、授業を行うことは大切である。

- ① 進んで自分を表現したり、多くの人たちと触れあおうとする
- ② 外国の人とコミュニケーションを図ろうとする
- ③ 外国の生活習慣や人々のものの考え方や見方に興味を持つ

3 子どもと一緒に楽しむことの理解

従来の教え込む英語というイメージを払拭し、完璧な英語を話す必要もなく、むしろ遊び感覚、ゲーム感覚で、活動を行うことを重視する。したがって、シラバスの中に、学生が具体的に、子どもと同じ活動を体験する場を多く設定するように心がける。特に、この3の子どもと一緒に楽しむ活動の在り方を重視した講義内容の設定が、学生からは、将来、子どもの指導場面に立ったときの具体的方法として理解することができるとの評価が高かった。

Ⅳ 具体的な講義場面の様子から

学生に評判の高かった講義の一場面を紹介する。

例1 「自己紹介カードの作成と英語であいさつの活動」

- 1 画用紙とカラーペンを使い、自分のネームカードを作成する。
- 2 ネームカードを使って、毎回、講義の始めに、英語で挨拶を交わす。
- 3 毎回、違う相手3人以上と挨拶を行う。



写真3 ネームカード



写真4 あいさつタイム

※留意点

- ・はじめは、恥ずかしがる学生もいるが、「1人で3人以上と英語で挨拶しよう」と限

定するとよい。

例2 「料理あてクイズ」に挑戦

- 1 グループ内で何の料理を作るかを決める
- 2 その料理に必要な素材のカードを作る
- 3 グループ毎に、素材をカードと英語で示す。
- 4 みんなで、何の料理かを当てる。

※ 各グループで、作る料理は、他のグループには、秘密にする。



写真5 料理あてクイズ



写真6 料理の素材（自作カード）

※留意点

画用紙、ペン、マグネットシートなど、用具をあらかじめ準備しておく

V 学生の問題意識を効果的な指導法に生かす

学生たちは、教材づくり、アクティビティ、歌などの諸活動や方法を学びながら、新たな問題意識を持つに至った。そのことを具体化することで、指導法や指導技術の高まりが期待できるものとする。以下に、多くの学生の抱く疑問をQ&A方式で述べる。

◎問い1 「ゲームを行うときの留意点は何ですか？」

○答え1 ア 言葉を使ったゲームであること イ 全ての子どもが参加できること
ウ スリル感のあるゲームにすること

◎問い2 「歌を歌うときの留意点は何ですか？」

答え2 ア 曲の選び方（歌詞がやさしい、リズムが単純で反復性がある、など）
イ 指導の仕方に気をつける（無理に歌詞を覚えさせない、時には、歌の上手な先生に指導してもらう、など）

◎問い3 「教材の準備での配慮事項は、何ですか？」

○答え3 ア 活動をマンネリ化させないために、提示の場やタイミングを考える。

イ 子どもたち自身で作成できるものは、作成させる。(※大学の講義では、学生が実際に作成することを体験する活動が大切になる)

◎問い4 「楽しく英語を学び、英語嫌いを作らない秘訣は、何ですか？」

○答え4 ア 日常的に挨拶などの場で、ネームカードを提示するなど、自然に英語を使える状況をつくること

イ 音声、表現などを、日常の生活と結び付けて使うようにすること

◎問い5 「教室の雰囲気づくりに大切なことは何ですか？」

○答え5 ア 間違いが許される雰囲気づくり

イ 教師自身も一緒に楽しむこと

ウ 「good!」「nice!」など、小さなことでもほめてあげること

また、「学級担任は、最低限、どんな英語を知っておく必要があるのだろうか？」という疑問については、学生のみならず、現職の教員も抱く疑問であろう。そこで、次のような表を配付した。

◎学級担任の先生が日常的に使用する英語

1 授業開始時、終了時

・ Hello ・ Good morning ・ Good afternoon ・ How are you
・ Good bye ・ See you

2 子どもに出す指示

・ Stand up ・ Sit down ・ Be quiet ・ Stop ・ Look ・ Wait
・ let's～

3 子どもをほめる言葉

・ Good ・ Good job ・ Nice ・ Great ・ Wonderful

4 よく使う表現

・ Hear you are ・ Are you ready? ・ Do you understand?
・ Try again ・ You're welcome That's light

Ⅵ まとめ

「小学校外国語活動」は、はじまったばかりの活動であり、全国の小学校で、実践が模索されている最中にある。さらには、第5,6学年における教科化、第3,4学年における活動化などが実現されそうである。大学においては、英語に関しても“即戦力”となり得る教員の養成に当たることが大きな使命であると考え。そのための指導法について、今後も研究を重ねていく必要がある。

引用・参考文献

- 1 小学校学習指導要領解説外国語活動編 文部科学省（2008年）
- 2 「Hi, friends！ 1」 文部科学省（2015年）
- 3 「Hi, friends！ 2」 文部科学省（2015年）
- 4 「ハロー イングリッシュ」 北海道立教育研究所（2003年）
- 5 小学校外国語活動指導法ガイド DVD 東京書籍（2015年）